

# ロールシャッハ法の陰影反応における 体験様式についての一考察

飯 野 秀 子

## 1. はじめに

### 1. ロールシャッハ法における材質反応の意義

ロールシャッハ法の記号化・解釈の歴史の中でも、図版の陰影を用いた陰影反応については、これまで最も議論が多く決定的な理論が無いと言われ続けている(Exner,1986)。本論では、陰影反応の下位カテゴリーである材質反応を取り上げ、特にその中の分化した材質反応であるFcに着目しつつ、そこに想定される体験のあり方について検討するものである。このことは、ロールシャッハ法という一つの査定技法の技術的理論的成熟への貢献というだけでなく、現代の心理臨床の場での営みを考える上でも、何らかの手がかりを与えてくれるのではないかと考える。

本論ではこの問題を取り上げるに当たり、Klopfer, B.の見解を取り上げ、諸家の研究と対比させつつ検討する。Klopferは、材質反応の重要性を初めて認めたとされる(Exner,1986)。またロールシャッハ法の理論的背景について高く評価される考察を行ったSchachtel (1966)も、陰影反応における重要な理論としてKlopferの研究に言及している。Klopferには他家に見られない独自の見解があり、これを検討することで、材質反応の背景に想定される体験の様相について考える手がかりが得られるものと期待する。なおKlopferの見解については、完成形とされる1954年の著作(Klopfer,B., Ainsworth, Klopfer,W.G. and Holt, 1954)に基づくこととする。

次項では"テクスチュア・センシティブィティ"という材質反応と関わる感覚を取り上げ、材質反応を検討する意義を考える。その後、材質反応に関するこれまでの重要な見解をKlopferのそれと対比させつつ紹介し、その上でKlopferの理論から読み取りうる、材質反応、特にその中でもFcとスコアされる反応の、体験の様相と背景について、筆者の考える可能性を示したい。

### 2. テクスチュア・センシティブィティ

"テクスチュア・センシティブィティ"とは、単純化して言えば、材質感、肌理(きめ)、手触りの感覚などへの感受性を指す。ロールシャッハ法で用いられる図版には、白地の中に、無彩色あるいは有彩色によって満たされた図となる領域がある。その領域内には、図版により程度の差はあれ明暗の差、つまりむらや滲み、ばかしといったものが認められる。この陰影という要素は、図版中の赤色という色彩が否応なく目に飛び込んでくるのに比較すれば、はるかに微妙で控えめな要素である。それを捉え、手触りのような感覚として認知することが、"テクスチュア・センシティブィティ"である。これは、ロールシャッハ法の反応決定因のうち、陰影を用いた反応全般を指す陰影反応のさらに下位カテゴリーである、表面組織の印象に着目した、材質反応と呼ばれる一群の反応とかわりがある。陰影反応は他の反応決定因に比較して出現頻度が少ないが、その中で最も見られやすいのが材質反応であり、"テクスチュア・センシティブィティ"はそこで

中核となる感覚である。

Klopperら(1954)によれば、陰影への感受性の存在は、個人が自分の愛情欲求の存在を認知していることを意味し、人間の基本的安全感に関係しているという。つまり、自己の存在を基底的なレベルで肯定し後年の対人関係を育んでいく基礎があるという、発達的に重要な課題がある程度達成されていると推測されうる。Klopperは、陰影への感受性がロールシャッハ法の通常の手続きにおいて認められない時は、さらに詳しく焦点化して質疑を行い、その有無を慎重に確かめる必要があるという。陰影への感受性がない(shading insensitivity)と考えられる時、その人は、幼少期に激しい愛情欠如の経験があり、安定した依存関係や愛情関係への欲求が、激しく抑圧されてきたことを示すという仮説が与えられる。すなわち、深く意味ある対外関係への能力が著しく損なわれているとされるのである。陰影への感受性の有無は、最もベーシックな対人関係と自己感覚のあり方にも関わる、重要な意味を持つものといえよう。

上記のように考えると、陰影への感受性が表現される際に最も一般的に結びつきやすいと考えられる"テクスチュア・センシティブィティ"は、心理臨床や精神医療の現場では、非常に意味ある手がかりとなりうる。統合失調症の理解とその治療において独自の論考をなしてきている中井(1998)は、「スクリブルに投影できない場合のために—テクスチュア感受性を問う方法—」と題した小論の中で、"テクスチュア・センシティブィティ"の重要性を指摘した。それによれば、ロールシャッハ法で材質反応が出やすいとされる図版で「毛皮とか絨毯とかいう「きめ」に反応する人は軽いか予後がいい」のであり、特に統合失調症の場合にこれは重要な因子であるという。中井は"テクスチュア・センシティブィティ"の意味を、「甘えられるか、甘えを、甘えたい気持ちを感じてできるか」と簡明に示した後、統合失調症患者と甘えとの関係については土居健郎がしばしば指摘しているばかりではなく、「臨床家ならば、患者に甘え体験が一般に乏しいことを知っているだろう」と述べた。その上で、統合失調症者に限らず、"テクスチュア・センシティブィティ"の有無、あるいは回復過程のどの時点でそれを示すかは、かなり重要な指標であるとしている。そして、"テクスチュア・センシティブィティ"の重要性は、どのような患者にとっても同様にいえることなのだという。この中井の指摘は、先のKlopperの見解とともに、人間の基底的なレベルにおいて育まれるべきものがあること、それが"テクスチュア・センシティブィティ"の有無やあり方に表れうることを、示しているといえる。

こうした見解は、実証的にもある程度裏付けられている。ロールシャッハ法の過去の研究を概観した上で実証的検討に基礎づけられた統合を目指した、Exnerの包括システム(Exner,1986)では、材質反応は極めて安定した出現頻度を示すという。600名の患者ではない成人のうちほぼ90%が少なくとも1個の材質反応を与え、さらにほとんどは1個だけで、それは通常Klopper法のFcに当たる反応である。また、患者群は非患者群より材質反応はかなり少なく、従ってこの反応の欠如は解釈上重要だという。他には、栗村・篠置(1997)が、精神科受診者を神経症圏群と統合失調症圏群に分け、両群のロールシャッハ法の結果を比較した。そこでは、記号化の各領域にほとんど有意差が認められない中で、「対人関係の基本となるいわゆる基本的信頼感に関するだろうFc」(Klopper法の分化した材質反応)と、「その能力でもって様々な対人的状況にあった反応を示すといわれるFC」(Klopper法の形態色彩反応)のみが、統合失調症圏群に有意に少ないと認められた。Fcとは、Klopper法では"テクスチュア・センシティブィティ"を表す反応の中でも分化し

た望ましい反応とされ、「愛情欲求の認知と受容」を意味する。栗村らは統合失調症の基礎的障害の一つに基本的対人関係能力の障害を指摘し、「その要因として基本的信頼感の障害、すなわちKlopfersの言葉を借りれば、愛情欲求領域における根源的障害をあげたい」とした。このように、「テクスチュア・センシティブィティ」の有無の重要性は、実証的にも承認され得ると考えられる。

以上に示してきたように、「テクスチュア・センシティブィティ」の有無は、心理的援助を考える上で非常に意味ある観点だといえよう。この感受性が認められない状態とは、psychoticなレベルの問題がありうることを示唆し、心理臨床における援助可能性を考えれば、当然押さえておくべきポイントといえる。とはいえ、「テクスチュア・センシティブィティ」が有る」と認められればそれで何も心配がない、ということではない。「有る」とされる中にも、病的とされる状態から、いわゆる正常成人とされる幅まで含む、様々なあり方が想定できるのである。Klopfersら(1954)も指摘したように、愛情欲求に関する問題は、どんな人でも多少なりとも抱えている。言い換えれば、「テクスチュア・センシティブィティ」のあり方の様相が問題になる、つまりその人の生きにくさに関わっていると考えられる場合がある、と捉えることもできるだろう。

Exner(1986)の非患者成人の標本では材質反応の最頻値は1であるが、範囲としては0～5である。Exnerはそうした資料にもとづき、材質反応の欠如だけでなくその多さも、解釈上非常に注目されることを指摘した。材質反応の多さは、親密性への強い欲求の指標となるという。またKlopfersら(1954)は、最も望ましいとされる材質反応Fcについて、それが多過ぎる時、愛情欲求の問題が適応について不釣り合いな役目を演じているとし、そうした人の抱える困難を示唆している。このように、「テクスチュア・センシティブィティ」があり、その感覚に病的なものが含まれない範囲であっても、そこに何らかの過剰さが示されることがあり、その場合、材質反応の解釈仮説に関わる領域での困難さがあると推測されるのである。

材質反応における過剰さの表れとしては、それが1個以上存在し、場合によりさらに多いことが考えられる。また、質の問題も重要だろう。記号化の詳細は後述するが、材質反応には病的体験の存在を示唆する反応から正常レベルの反応まであり、その程度は、段階的に設けられた下位分類の記号と、形態水準評定で表現される。ここで問題にしている場合について考えるなら、それらのうち最も望ましいとされる種類の反応、KlopfersでいえばFcという反応であることが前提となろう。そして同時に、その反応が質的に何らかの過剰さを含んでいることになるだろう。

上記のような問題意識のもと本論では、Fcの背景に想定されうる体験について、特にその過剰さにつながる性質に焦点を当てつつ検討していく。それにより、ある程度現実適応的でありながらも、安全感に関わる部分での揺れやすさを示すあり方の理解に、貢献しうると考える。

### 3. 反応のもたらされる過程やその背景について検討する意味

本論では、分類記号や解釈を単に技術的レベルで取り扱うのではなく、反応の背景の体験過程を考える立場を取る。それがロールシャッハ法を理解する上で重要なと同時に、心理臨床家のクライアント理解に寄与すると考えるからである。この点について筆者は、心理検査の学びが心理臨床の学びに通底するという観点から論じ、ロールシャッハ法における「記号化や解釈仮説は、単なる当てはめべき符号や固定された意味付けではなく、検査者自身の血の通った理解があってはじめて、それを通じた人間理解に至ることができる」ことを検討した(飯野,2004)。それを踏

まえ、反応過程や背景を考える意味について、主に大山(2004)を参照しつつ改めて整理する。

プロトコルを人間理解に結びつけるためには、厳格な記号化・数量化とそれに基づく解釈は、基礎であり常に実践すべき拠り所である。しかし同時に心得ておくべきなのは、それらを皮相な理解にもとづき教条的に当てはめる態度は、一人の人間像としての被検者に迫ることをむしろ阻害するという点である。重要なのは、「なぜそのような記号化や解釈がなされるのか」といった根拠を、技法そのものに込められた人間観や世界観を知ることも含めて、まずは了解しておく必要がある」(大山,2004)ことを、常に心に留めておく姿勢であろう。これは、スコアの理論的背景の理解を重視したSchachtel(1966)をはじめ、多くの研究者が指摘するところである。

反応を媒介として被検者の人格を理解するとは、どういうことだろうか。大山は、被検者の語り(=反応)は、その内側で生々流転するイメージを、言語という特定の形式に構造化していく作業であるとする。その語りをきっかけに検査者の持つ内的イメージが活性化し、検査者は、「語り手と聞き手との関係性の中で一つの表現へと凝縮した言葉を、今度は逆に揺るがし拡張していく」のである。そのようにして検査者は、自身の内的過程において、「語り手の中で流動するイメージから言葉が立ち上がる瞬間にまで、遡ろうとする」。これは、氏原(2005)が、反応とは普遍的なものが被検者の独自性を通じて顕れたものであり、それを見る者が、同様の普遍性を備えているはずの自身の内的なプロセスに思いを凝らすことで、反応に至る被検者のプロセスに迫ることができるとしたこととも重なる。そしてこのような被検者理解の過程は、心理臨床の場でのクライアント理解になぞらえる(氏原,2005)。本論は、材質反応に結びつく語りの背景について、一つの仮説を提示し、検査者自身がイメージを拓けていく過程にさらなる可能性を拓くことを目指す訳だが、そのことは同時に、心理臨床家のクライアント理解に寄与すると考える。

## II. 陰影反応、特に下位分類としての材質反応についての諸説

### 1. 陰影反応の一般的4カテゴリー

この章では、前節までの問題意識に基づき、ロールシャッハ法における陰影反応について、特に材質反応とFcに焦点づけつつ、諸説を概観する。その前提として、諸家の研究から抽出した共通言語となりうる概念について取り上げ解説する。その上で、陰影反応を初めて詳細に分類しその後大きな影響を与えたとされる、Klopferの見解を紹介する。その後、創案者であるRorschach以降の重要な考え方のいくつかを、Klopferと対比させつつ示すこととする。

陰影反応の定義や分類には、諸家の見解を一つの次元で比較できない状況がある。井出・岩淵(1986)や大貫(1987)が諸家の陰影反応の分類カテゴリーを比較して示したように、そもそもの設定基準の相違により、おのおのの研究者の分類は相互に複雑に交錯している。解釈仮説についても、氏原(2005)によれば、特に陰影反応についてのそれは、いまだに諸家の直感的閃き(思いつき)によっており、全く異なる見解が述べられて研究者を混乱させるという。ただし、諸家の理論を通観すると、質の異なるいくつかの下位分類が必要とされている点は共通している。これは、拡散・展望・材質・白黒という四つの観点に集約できると考えられる。諸家により細部は異なるものの、この四つを重要な概念として、この先の議論で参照できる共通言語とすることができよう。

拡散Diffusionとは、「充満しているという感じや、陰影のつけられた領域内に、はっきりした境目や構造がないことを特徴としている」(Schachtel,1966)反応で、プロットの全体的な陰影の

印象から生じるとされる。反応内容としては、「霧」「煙」「雲」などが挙げられる。展望Vistaは、陰影が奥行きや立体感をもたらす反応である。三次元的風景や、物と物の間の距離を指摘した反応がこれに当たる。絵画における明暗による遠近法に対応するといえよう。材質Textureは対象の材質感についての反応で、「毛皮」「パン粉をまぶして揚げたエビ」などである。白黒Achromatic colorは、陰影が無彩色として用いられた反応で、「黒い蝶」などである。ここに挙げた四つは、その質の違いが見過ごせないものとして着目されてきたと言えよう。

また、ここで、Rorschach以来の基本として、反応の概念が形態としてどの程度確定性を持つかを重視し、反応をもたらした体験の種類(色彩や陰影)と組み合わせて記号に反映させる場合が多いことを押さえておきたい。Klopferの材質反応で言えば、確定的な形態を持つ概念との結合にはFcが記号化され、半確定的形態はcF、形態を持たないものはcと記号化される。

## 2. Klopferの見解

これから陰影反応に関する諸家の重要な見解のいくつかを、特に材質反応とFcの取り扱いに留意しつつ概観する。その際、詳細な解説にあまり立ち入らず、おのおの見解の核となる観点をその分類法と解釈から読み取り、そこに想定された内的過程を捉えることを目指すものとする。

まず最初に、陰影反応に関して最も包括的(Exner,1986)とされるKlopferら(1954)の考えについて述べる。Klopferは陰影反応を生む刺激を、図版の灰色や時には色彩領域の陰影という特性であるとした。これにより、白黒を色相として利用する観点は陰影反応には含まれず、無彩色反応として独立させられた。そもそも「白」「黒」「灰色」とした時点で、そこには明度の差への関心が抜け落ちているからである。基礎となる図版上の刺激を、色相を問わない明度差とした点で明確である。そのような刺激特性から、主に三つの印象を生むものが、陰影反応だという。そこで生じる感覚とは、1)陰影が接触感を生じさせ表面組織の見え方の印象を与える材質反応Fc・cF・c、2)陰影が立体感や奥行きの印象を与えるもの(展望反応FKと、拡散反応KF・Kに分かれる)、3)陰影が平面に投影された立体的広がり印象を与えるFk・kF・k、の三つである。3)はKlopferだけの独自の分類だが、該当する反応はごく少ない。Klopferはこの三種の分類とともに、陰影の用い方が細やかに分化しているか未分化であるかという区別を重要視した。

分化した陰影反応はFc, FK, Fkで、それ以外は未分化な陰影反応である。先に示したようにロールシャッハ法では、形態規定性の程度によって同じ決定因の中でも段階的に異なる記号が与えられるのが基本であり、陰影反応も同様の原理に従う。しかしKlopferの際立った特徴は、材質反応においてのみ、陰影から生じた印象それ自体の高度な分化が、形態の確定度合いより優先されて記号を決定する、ということである。半確定的な形態を持つ概念に、高度に分化した陰影の印象が結びついている場合、他の研究者なら多くはcFとするところを、KlopferはFcとする。反応例としては、陰影をうまく用いて織物の材質感を詳しく正確に描写した場合で、その織物が洋服のような形を持たない布きれであっても、Fcとする。これは、他の決定因にない、また他のほとんどの研究者にも見られない、Klopferの独特な考え方である。

さらにKlopferの陰影反応の第二の特徴は、慣用的な規則を多く持ったため複雑なことだが、最も例外が多いのは、ここでも、最も分化した材質反応のFcである。例外とは次の場合である。1)陰影によって丸みが強調され、面と面との距離よりも表面の感じに重きが置かれている場合はFKとせずFcとする、2)特別に距離感を伴わない「セロファン的透明さ」をFcとする、3)よく磨

いた表面の光沢や滑らかに光った印象をFcとする、4)写真のように天然色を無彩色の濃淡で表したものをFcとする、5)対象の部分を明細化するために、通常無視されて分化した概念が生じない微妙な陰影を使った場合、陰影の高度な分化fine differentiationsとしてFcを与える。これらの反応はいずれも、他家の記号化方式においては異なる扱いをされるだろう。

本論ではFcに特に焦点づけ、その背景となる体験を考える訳だが、Fcについて最も独自の見解を打ち出したのがKlopferといえる。上記のようなFcの定義は、Klopfer自身が認めるように論理的一貫性に欠ける(氏原,2005)。Klopferは、主観的直感からこうした慣用的例外を設けてFcの範囲を拡張した訳だが、その拡張部分の特徴をきめ細かく見直し、Fcに包含される意味を検討することで、Klopferの直感が捉えていた体験のあり方に迫ることができよう。

Klopferの設けた例外規定の特徴を考えると、1)・2)・3)・5)のように、距離感と材質感を細やかに弁別し、材質感の様々な可能性をすくい上げていると言うことができる。他家は、距離感については広くとらえ、面と面、物と物との明白な距離感から、一つの物の持つ丸みという立体感までを包含していることが多い。それらの方式で表面組織効果・材質という時は、かなり直接的に触覚の感覚を手がかりにしている。直接手を触れているかのような距離の無さが材質反応とされると言える。その0という距離を超えたものは全て、つまり、単体の持つ奥行きという視覚的三次元感覚でもものの丸みを見ることや、複数の物(面)の間の空間以上に距離感があることは、展望反応とされる。Klopferの場合、複数の対象間の距離はFKとしたが、そこに吸収されがちな単体の丸みは、(立体感を強調しない限り)表面効果とみなし、材質反応Fcとした。直接触れているほど距離が喪失していなくても、その対象にじっと視線を留めて、いわば視線によってその表面をなでるような態度は、直接接触と同様、材質反応と認めるのである。

ここで言う対象とは、単に図版上のインク・プロットそのものでも、また単なる反応概念そのものとも言い難い。見つめる先にはその二つが既に重なり合っていると言わねばならないだろう。そのような対象にじっと意識を留め肉薄し、そのあり方をつぶさに、あるいはくまなく感じ取ろうとする態度、これが、Klopferにおける分化した材質反応であるFcの、中核にある態度とは考えられないだろうか。図版に対して時に、陰影への高い感受性が図版上のその特徴に引き寄せられるように着目し、喚起させられた概念である対象の性質を探る手がかりとして、さらに陰影そのものの微妙な差異を追求する。手がかりとされた陰影が反応として結実するのが、丸みであったり輝きであったり、あるいは思わぬ口口の歪め方を示すかすかな影なのである。

Klopferの例外規定から明らかになるのは、一つの対象にじっとまなざしを注ぎ細やかな観察の触手を伸ばしてその性質を掴もうという、注意深い探索の態度への着目と言える。その態度が材質反応として取り上げられるべき核心であると考えられる。分化の度合いを定形的形体との結合の度合いに優先させる記号化方式は、そのための方法として理解できるのである。材質反応におけるKlopferの分類は、このような視点から導かれたと考えられはしないだろうか。

陰影反応全般の解釈についてKlopferは、愛情欲求の問題を挙げた。陰影を取り扱う仕方は自身の愛情欲求を処理するやり方を示唆するという。その根拠は、図版の陰影刺激が接触感を生じさせ、それが基本的安全を求める欲求を引き起こすからとした。下位カテゴリーは個人の対処の仕方の違いを表すとし、材質、展望、拡散にそれぞれニュアンスの異なる解釈が与えられた。

拡散反応は、愛情の満足に関する欲求不満の反映で、漠然と拡がった浮動的不安を示すという。

展望反応は、内省的努力や見通しにより問題を客観化する試みを示し、それにより不安に耐える安定化作用を持つ。この主体性の程度の違いが、未分化な陰影反応と分化したその差と言えよう。

材質反応については、その有無と分化度が、個人の愛情への欲求と依存性の認知の分化の度合いに関係するとした。最も分化度の高いFcでは、愛情欲求は幼児的な欲求ではなく、より洗練され、承認や所属、他者からの応答性を求めることで安全感を得ることが目標となる。そしてこの反応は、他者との深く意味ある関係を確立するための基礎的な発達が遂げられ、基本的な安全への要求がよく満足されている時のみ生じるという。他人に対する感受性という点で受動的である、Fcにおける感受性は、傷つきやすい感情、情緒的な雰囲気の中の何かの曇りを感じ取る、といった意味のものである。さらに、Fcにおける慣用的例外規定の解釈について見ておこう。Klopferは、Fcにおける分化度は、知的な理解、制御を意味するという。具体的で粗雑な触覚的感触から離れるほど、愛情欲求の知性化の意味が強まる。それは、分化した型の造形物、彫刻、透明さなどの反応である。また、色彩の写真的表現として陰影を用いる反応の場合、不成功な昇華という仮説が与えられる。これら例外規定の場合、高度に抑制された表現と言えるだろう。

### 3. Rorschachの見解

ロールシャッハ法の創案者であるRorschachは、『精神診断学』出版後の研究で、初めて、陰影を用いた反応に対してF(Fb)という記号の単一のカテゴリーを設定したが、それを発展させる間もなく亡くなった。Rorschach自身がF(Fb)をスコアした反応例は、遠近感を強調した風景、煙、地形の高低やけわしい海岸などである。ここには、拡散反応、展望反応、材質反応と呼ばれるものが、白黒反応を除きほぼ包含されている。ただし本論で着目している材質反応は、あまり意識されていない。Rorschachが取り上げた事例の中では、「けわしい海岸」などの材質感に近い感覚を持つと思われる反応がF(Fb)とされた一方、現代のロールシャッハ法において材質感を伴う平凡反応とされる、VI図での「背骨の部分が非常に濃くくっきりしている猛獣の毛皮」が、陰影を用いた反応とはみなされていない。

Rorschachは陰影反応の定義を、「色彩ではなく、明暗が第一の決定因となっている反応」とし、陰影反応の多くに固有なのは、空間的かつ遠近法的なものの強調だと述べた。奥行き感覚に着目すれば、必然的に、遠近感のある風景や空間を満たす煙などが取り上げられることになる。これはKlopferの展望反応と拡散反応に当たる。Exner(1986)は、Rorschachの陰影反応は主に拡散について発展させたものだとしている。Rorschachが、奥行き感覚に比べればより二次元に近い感覚である表面組織への着目、つまり材質感覚に関しあまり注意を払っていないという点については、後段で改めて詳述する。

Rorschachの陰影反応の解釈は、空間的なものや奥行きの判断に対する特殊な才能が、小心なほど用心深く人に合わせる、抑うつ的なニュアンスを帯びた性格の人の情動性と相関しており、また、支えがない、不安定、ばらばらになりそうという感情を内容とする、ある種の不全感とも関係しているという。この解釈は、その後の諸家の研究の広がりの中でも常に承認されてきた(Exner,1986)が、これが、主に奥行きや三次元の感覚に着目したものであり、Klopferで言えば拡散反応と展望反応に主に当てはまる解釈であることには、留意しておきたい。

#### 4. Exnerの見解

「プロットの明暗の特徴が決定因子として用いられる反応」(Exner,1986)が、Exnerの陰影反応の定義である。従ってKlopferと同様、白黒反応は陰影反応から分離された。しかし解釈に関しては、濃淡変数SHという変数が設けられ、ここでは白黒を含む陰影反応の四種の変数の合成となっている。陰影反応の下位分類設定に当たっては、多様な慣用的例外が生む複雑さを嫌い、明確な基準とシンプルな分類を目指した。材質・展望・拡散の、独立した三つの下位カテゴリーのおおのにおの、形態規定性に従って異なる三つの記号を当て、Klopferのような慣用的規定を設けなかった。拡散反応は、陰影が他の二つより不明瞭で漠然とした用いられ方をする場合とされ、展望反応は、形の特徴でなく陰影が奥行きや立体性を表す場合である。材質反応とする場合の判断の基準は、触覚的感覚を用いて、対象の性質や材質について述べていることである。これらの基準を明確に適用できるようにするため、陰影でなく形態にのみもとづく立体反応や、図版の対称性から、鏡像や反射、左右一組の何かと見る反応には、別種の新しい記号を与えた。これはKlopferにおいては陰影の中のいずれかの下位分類に含まれる場合がある。さらに、無彩色の領域に色彩の存在を認めた時には、色彩投影CPとして特殊スコアを設けた。これに関してExnerは、CPを答える者のほとんどは、プロットの濃淡の特徴を用いて色彩を述べる傾向があり、それに対し拡散反応のスコアを与えるべきだとしている。

Exnerの分類では、基準を明確にし記号化の誤差を少なくすることが重要である。反応は、外から見て記述的に判断できるようなものとして捉えられ、弁別されねばならない。そうすれば、プロットに向かった人の内的な体験やエネルギーの方向を付度することなく、実際に手を動かしたかどうか、というような次元で判断が可能になる。こうした、分類基準を作る際の姿勢自体が、Klopferとは異なるということができる。またExnerは、RorschachやKlopferが用いた、視覚的直感的に反応の分布をつかむためのサイコグラムを採用せず、構造一覧表に記載された数値と、定められた解釈の手続きを拠り所としている。

解釈としては、SHの値がある程度以上になった時に、その下位分類が詳しく検討される。下位分類のおおの種類の反応は、共通点よりも異なる性質の方が多いという。拡散反応は、無力感や統制の喪失、効果的に反応できないことへの心配などと関係するが、状況に影響される性質を持つ。展望反応は、自己に焦点づけた行動で生じる、否定的感情体験に関係するという。材質反応については、多いときは、親密性への強い欲求を示し、孤独を経験しているか、他者への依存欲求が通常より強いとした。材質反応がない場合、対人接触により防衛的だとしている。

#### 5. Schachtelの見解

Schachtel(1966)は、その著作において「陰影反応で生じる認知的特性と、このような特性の認知を生む、もしくはその認知によって強められる体験—認知的態度」について考察した。そこでは、まず考察の前提として、無彩色のプロットの全体的な陰影は、多くの人にとっては決定因となるほど印象的なものではないと述べた。その例外が、材質反応であるという。そして、全体的な陰影が決定因になる場合、それによって印象を受けるだけの特殊な感受性や傾向があることが前提であると指摘した。その上で、陰影において最も基本的な二つの態度として、暗さが不吉な気分で見られる反応と、拡散に対する反応を挙げた。暗さへの不吉感を伴う反応は、有彩色における温かい、生き生きしているなどの印象と同様のものとされる。これは、本論で先に共通言

語として抽出した言葉を用いれば、白黒反応になる。Schachtelはこの反応が、プロットの暗さの印象によって賦活される、見る人の中の不吉な気分の存在を意味するとしている。拡散への反応はこれと別の認知態度で生じる。霧や煙のような、安定性や確固さ、明瞭さを欠いた、とらえ所の無いものを認知することは、そうした体験の受け入れやすさが前提である。その感受性は漠然とした不安の状態で生じやすく、統覚力の全般的低下を起こすのである。Schachtelはこの考え方が、Rorschachが陰影反応の奥行きと深さの要素を強調し、そうした認知をする才能がある種の不全感を示すと述べたことと、関連があるという。Schachtelは、暗さと拡散という二つの反応を、Chという記号で捉えた。その分類基準は、未分化で拡散した全体的な陰影による印象であることである。Chの中でさらに、確定的形態との結合の度合いにより三段階を定める。

一方、「陰影のこまかいニュアンスに対する念入りな注意」に基づく反応には(C)という記号が与えられる。その基準は、二つかそれ以上の不連続な陰影の認知によることで、確定的形態との結合の度合いにより三段階を定める。この反応の、陰影の種々のニュアンスに対する注目や感受性は、人間関係の中での情緒的含蓄や意味に対する感受性に対応するという。ニュアンスを探索し、あからさまに示されない、底流の指標を拾い上げるための感覚が研ぎ澄まされているのである。そしてこれが色彩反応より多いことは、懸念を伴う緊張を意味すると意味付けた。それは、Rorschachが述べた「懸念や用心を伴った、自由さのない情緒的適応」と関連するという。

材質反応の取り扱いについては、特にそのための下位分類を作らず、陰影の認知の分化の度合いによって、二種の記号のいずれかにされるとした。未分化な陰影使用はCh系、分化した陰影使用は(C)系となる。下位分類において、材質反応を単一のカテゴリーとしたKlopferとは異なる。だがSchachtelの示した下位分類設定の基準は、Klopferが陰影の使用が分化しているかどうかを重視し、材質・拡散・展望を含む全ての陰影反応を、分化した陰影反応と未分化な陰影反応に分け、その差異を強調したことと通底し、むしろそれをより前面に打ち出した見解である。これは重要な意味を持つ観点として留意する必要がある。

Schachtelは、材質反応の解釈には、快—不快の区別を重視した。Klopferによる愛情欲求との関連については、一部の材質反応との関連にとどまるとの見方を示した。陰影使用の分化度による解釈の違いが、材質感そのものに付与される意味付けより優先されているといえよう。

## 6. Lernerの見解

精神分析的な基礎を持つLerner(1998)は、主にRapaportに準じた記号化とSchachtelの体験的観点に基づき、陰影反応を二種に分類した。Ch反応は拡散、材質、奥行きと深さの体験に基づく反応を含み、形態との結合の程度により、三つの段階を持つ。この反応は、Schachtelに基づき、拡散し偏在し自由に浮動する不安感の体験と関連づけられた。

二つ目のc反応は、陰影の変化が知覚対象を輪郭づける時に用いられる。濃い陰影の部分に顔を見、微妙な陰影の変化を用いて目鼻や髪の生え際の輪郭を描く反応などである。LernerはSchachtelの示した、微妙さを探求するため触角を伸ばす知覚態度という説を引きながら、陰影の微妙さを探し、見だし、波長を合わせることは、危険性をはらんだ、不明瞭なものの中へ手探りで進んでいくことでもあると述べた。そこには、探求、洞察、明確な表現などの他、知覚的鋭敏さが必要である。しかしこれが「逸れた方向」へ行くこともあると指摘しており、それが自己愛患者の中の一タイプで、彼らは絶えず過剰警戒し、極めて鋭敏で傷つきやすく、受動的態度でも

ある。その背景には、「程よい養育」の欠如により、外界のこまかい視覚的情動的ニュアンスを知覚しようとする欲求から、明白なものや言葉の内容に対する注意への移行が、不完全であったことがある。この、微妙な陰影を捕まえて形として利用する反応は、質感を隔離して形にだけ用いるという意味で、微細な陰影の使用の中でも、特に知性化の進んだ極端な形と言えよう。

### III. Klopferの独自性から見た、分化した材質反応における体験

#### 1. 拡散との対比

諸家の陰影に対する見解では多くの場合、全体的陰影の印象から生じる拡散の感覚が取り上げられ、漠然とした不安を喚起させられるあり方が、特徴的と考えられている。これに対し材質の扱われ方は様々だが、陰影の細やかな取り扱いの感覚が着目されていると言えるだろう。

Fcの背景にある体験を考えるため、ここで改めて、拡散反応と材質反応の違いについて検討する。氏原(2005)はしばしば材質反応と拡散反応の質の差に触れ、前者が皮膚を介した接触感、つまり皮膚という自我境界の成立した世界の体験であり、後者は、境界が曖昧で自他未分化な、大洋感情に近い感覚だとしている。これは決定的な違いだろう。これに関して、分化の度合いを重視したKlopferの分類も、ヒントになる。Klopferは単に形態との結合でなく、陰影にどう迫るかという態度を分化として取り上げ記号に反映させたが、拡散反応の場合、その漠然とした性質そのものが特質であり、分化した反応にはなりえない。展望反応と拡散反応は、いずれも奥行きや三次元の感覚を持つK系ではあるが、分化した展望反応FKと未分化な拡散反応KF-Kは質が違い、段階的に移行することはないのである。材質反応はこれに比べ、分化した反応Fcから未分化な反応cF-cまでの幅を持つ。全体としては拡散反応に比べ能動的で、受動の中にも何かを自分から探ろうという態度がある。それが明確に能動的姿勢として表れるのが、分化した材質反応であるFcとなる。未分化な反応であるcFやcでは、この姿勢が曖昧なのである。

ここで、RorschachとKlopferにおける反応決定因相互の位置づけを参照しつつ、拡散反応と材質反応の違いについて別の観点から検討する。Rorschach(1921)は、反応を決めた位置に並べて整理する方法を提案しているが、そこから反応決定因のみを抜き出したものをFig.1に示した。後にこれをより明確なサイコグラムとしたKlopferによれば、被検者の知覚が自分自身の想像・欲求・動因に影響されているなら分布は左側に偏り(内向型)、主に外的刺激により影響されているなら分布は右に集中する(外拡型)。被検者の知覚が主に合理的で非個人的・非情緒的である時は、分布は中央に集中する。サイコグラムからRorschachとKlopferを比較することで、Klopferにおける陰影反応、ひいては材質反応の意味が、より明らかになると思われる。

|      |                 |      |                          |                                            |
|------|-----------------|------|--------------------------|--------------------------------------------|
| 運動反応 | 運動反応傾向<br>の形態反応 | 形態反応 | 色彩反応傾向<br>の形態反応<br>=陰影反応 | 色彩反応<br>形態色彩反応<br>・<br>色彩形態反応<br>・<br>色彩反応 |
|------|-----------------|------|--------------------------|--------------------------------------------|

Fig.1 Rorschachの整理法

Rorschachは、形態反応を中央に挟み左右を対比させる構図の中で、陰影反応を色彩側とした。これは、陰影反応の意味を未だ計りかねる段階で、「弱められた色彩」である無彩色としたことの影響があろう。しかしKlopferは、彼の三つの分類をRorschachの示した位置にまとめること

はしなかった(Fig.2)。材質反応はRorschachの陰影と同じ位置で、展望反応と拡散反応は、形態反応と運動反応の間とされた。左右いずれも、分化した反応が形態反応の隣とされた。

|   |    |   |   |   |    |   |    |   |    |    |    |   |
|---|----|---|---|---|----|---|----|---|----|----|----|---|
| M | FM | m | k | K | FK | F | Fc | c | C' | FC | CF | C |
|---|----|---|---|---|----|---|----|---|----|----|----|---|

Fig.2 Klopferのサイコグラムにおける反応決定因の配置

二つを比べると、Rorschachが示した陰影反応の位置は、Klopferのサイコグラムに重ねれば、材質反応と白黒反応の位置に該当することがわかる。また、前述のように、Rorschachは陰影反応で働く感覚として実質的に奥行きを重視したが、これは展望あるいは拡散反応にほぼ該当する。これらの反応は、Klopferにおいては、色彩とは逆の運動反応側に位置づけられる。

Rorschachが指摘した陰影反応が、実質的に展望反応・拡散反応だという事実は、Rorschach自身が、運動のような図版上に直接的に存在しない性質を与える感覚に対して、高い感受性を持っていたことが関係するのではないかと、筆者は考えている。運動も奥行きも、図版上に客観的には存在せず、プロット上よりもむしろ被検者の内的感覚により近いところから発する反応ということができよう。もちろん材質感、接触感であっても、そのものが図版上に存在する訳ではない。しかし材質感の体験では運動や奥行きよりも、被検者の主体はインクプロット上に実際に存在する陰影刺激そのものにぴったりと寄り添う。そのきめ細やかな探索によって、図版と主体の極めて近い距離が保たれつつ生じるのが、材質反応だといえよう。展望・拡散が運動に近縁の内向側にあり、その点で材質は色彩類似の外拡側と考えられることは、諸家の指摘する、材質反応の受動的性質を裏付けるだろう。ただしその上で、Schachtel(1966)の触覚についての考察を指摘しておきたい。材質反応と密接な関連があると言われる触覚は、色彩反応の体験になぞらえられる受動性と、形態反応の体験に重ねられる能動的観察の姿勢の中間にあり、場合によりいずれにも近づきうるという。ここに、記号で言えば形態規定性で定まる三段階と、陰影分化の度合いを重ねることができるだろう。そう考えると分化したFcの場合、受動的な基礎を持ちつつ、探索的に対象を注視する能動的な性質をも、強く併せ持つと考えられる。このことは、FcがKlopferのサイコグラム上で、形態反応に最も近いところに置かれている点とも符合するものであろう。

## 2. Fcにおける体験様式

本論の冒頭で"テクスチュア・センシティヴィティ"を取り上げ、これが病的な性質を含まずに示されることは、発達上重要な課題がある程度達成されていることを示唆すると述べた。ただしそれが何らかの過剰さを持つ時、これもまた生きる上の難しさにつながっていることがある。そのような体験のあり方への理解を深めようとする時、Klopferの分化した材質反応であるFcは、有効な視点を与えてくれるだろう。Fcの体験は、基本的に現実適応的なベースを持ち不安のある程度統制できているものだが、その対象に迫っていくあり方に、過剰になるというのがどういうことかを推測させるところがある。ありきたりの探索では納得できない、適当なところでやめて安心することのできない態度だということもできよう。これは、そうせざるを得ないという意味で、受動的なものでもある。飛び込んでくる色彩を拒否できないのと同様、過敏なアンテナが感知する陰影を無視できないのである。そうした状況では、主体にとって陰影はむしろ、こちらの探索を待ち、意味あり気に誘う、謎めいた存在といえる。踏み込んで述べれば、陰影の中には、

安全感を保証してくれるはずの何ものかがあるはずだ、という確信があればこそ、それを念入りに探り吟味することをやめない態度があるのではないだろうか。これは、中井(1999)が、表情ほど曖昧図形的なものはないと指摘しつつ、ロールシャッハ過程について、母親など重要人物の表情を微かな差から読む幼年期の過程の延長上にあるとした見解とも通じよう。確かに幼時の重要人物の表情ほど、その意味するところが重大でしかも謎めいたものは他にないと考えられる。分化したFcの過剰で厳しい探索は、曖昧図形をそのままにして簡単に安心できない、どこかに揺らぎやすさをもった主体の、安全保障感の希求の表れとも考えられるのである。

#### IV. おわりに

本論では、ロールシャッハ法における材質反応のFc反応について、Klopferの複雑な基準や慣用的例外を丹念に読み込み、それがいかなる体験を捉えようとしていたものかを検討した。さらに他家との比較を加え、Fcに想定される体験のあり方について、浮かび上がらせることを目指した。その結果、Fcの背景に想定される体験の一つの様相として、情緒的底流への感受性の高さを基礎とし、たびたび安全感の確認をせざるを得ない、強い探求の態度の存在が示唆された。このような観点が、心理査定のみならず心理臨床の場での臨床家の内的作業の過程にあることは、クライアント理解の可能性をわずかでも広げるものと考ええる。ただしこうした問題は、氏原(2005)の言うように、臨床的妥当性と数量的妥当性の両者を見据えて取り組まれねばならず、本論の考察に対しても、実証的検討や事例研究によりその妥当性を検討する試みを続ける必要があろう。

#### 文献

- Exner, Jr., J. E. (1986): *The Rorschach: A comprehensive system: Volume 1 (Second edition)*, New York: Wiley. 高橋雅春・高橋依子・田中富士夫監訳 (1991): 現代ロールシャッハ・テスト大系 (上). 金剛出版.
- 井手正吾・岩淵二郎(1986): ロールシャッハ・テストにおける陰影をめぐる基本的諸問題—Exnerによる総合と整理を中心として—. 旭川医科大学紀要, 7, 59-82
- 飯野秀子(2004): 基礎的実習を通じて心理臨床を学ぶということ—特にロールシャッハ法の体験的な学びをめぐる—. 京都大学大学院教育学研究科付属臨床教育実践研究センター紀要, 8, 55-68
- Klopfer, B., Ainsworth, M.D., Klopfer, W.G. and Holt, R.R. (1954): *Developments in the Rorschach technique, Volume 1*. New York: World Book.
- 栗村昭子・篠置昭男(1997): 精神科受診者のロールシャッハテスト・プロトコルにおける時代的変容の実証的研究(3)—濃淡反応について—. 人文論究, 46(4), 134-147
- Lerner, P.M. (1998): *Psychoanalytic perspectives on the Rorschach*. New Jersey: The Analytic Press, Inc. 溝口純二・菊池道子監訳(2002, 2003): ロールシャッハ法と精神分析的視点(上, 下). 金剛出版.
- 中井久夫 (1998): スクリブルに投影できない場合のために—テクスチュア感受性を問う方法—. 日本芸術療法学会誌, 29(1), 107-108
- 中井久夫(1999): ロールシャッハ・カードはどのようにしてできたのだろうか. 包括システムによる日本ロールシャッハ学会誌, 3(1), 3-16
- 大貫敬一(1987): ロールシャッハテスト陰影反応の分類カテゴリー—クロッパー, ピオトロフスキー, ベックの比較. 共立女子大学文芸学部紀要, 33, 1-14.
- 大山泰宏(2004): イメージを語る技法. 臨床心理学全書7臨床心理査定技法2. 皆藤章編. 51-99.
- Rorschach, H. (1921): *Psychodiagnostik: Methodik und Ergebnisse eines wahrnehmungsdiagnostischen Experiments*. (1972: 9ste Auflage) Bern: Hans Huber. 鈴木睦

- 夫沢 (1998):新・完訳精神診断学. 金子書房.
- Schachtel, E. G.(1966):*Experimental foundations of Rorschach's test*. New York: Basic Books.
- 空井健三・芝功博訳 (1975):ロールシャッハ・テストの体験的基礎. みすず書房.
- 氏原寛(2005):ロールシャッハ・テストとTATの解釈読本. 培風館.

(心理臨床学講座 博士後期課程3回生)

(受稿2005年9月9日、受理2005年12月8日)

## A Study on the Style of Experience of Shading Responses on the Rorschach

IINO Hideko

The study focuses on the style of experience, which is hypothesized as the background of Texture responses scored as "Fc" by Klopfer, B. The features of Klopfer's "Fc" are discussed through an investigation into his theory of scoring and interpretation of shading responses, and also by the comparison of his work with other important work including that of Hermann Rorschach's. Consequently, it is suggested that a preserved unmet need for basic security may be related to one of the attitudes and modes of experience hypothesized as the background of the excessive "Fc". This style of experience places emphasis on shading sensitivity. Such people try to control their anxiety in an intellectual manner and at the same time they have no choice but to attempt to explore the nuances about a sign of security. This theory-based inference may be useful for therapists to expand their understanding of clients in psychotherapy.